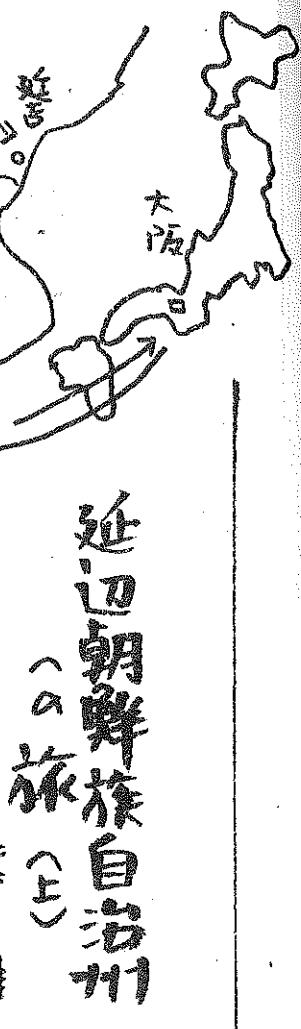


1988.7.31



延辺朝鮮族自治州 へへ旅(上)

飛田唯一



今年六月、中国より私に一通の「招待状」が届いた。七月下旬に中国の延吉で開かれる「中日関係学会」への招待状である。「中華人民共和国教育委員会外事局」の印があるいかめしいものだ。しかし、これは特に私個人に来たといふものではなく『中国の朝鮮族』(大村益夫訳)をむくげの金が自費出版したことに対するお礼のようなもので、同書の編集代表である延辺歴史研究所所長・韓俊光先生らの骨おりによるものだ。学会というのには少々氣おくれするが、せつかくの機会だと思い、学生センサーに出張としてもらい出かけることにした。

実は、今回の旅の目的は二つ。一つは、文通を続いている柳東浩氏に会うこと、もう一つは白頭山に登ることだ。学会に呼ばれたのに不謹慎なことだが仕方ない。柳東浩氏は延辺朝鮮族自治州に住む朝鮮人で、日帝時代朝鮮義勇軍で翻った老闘士。私が『季刊三千里』に書いた文章を読んで、手紙を下さったことから文通が続いている。

旅の準備は万全とはいえないが、北京には大学時代の友人の平塚潔氏もいる。中国語は「二ハオ」とマージャン用語しか知らないが、延辺朝鮮族自治州までたどりつけば朝鮮語も通じて、なんとかなるだろうとひとり旅をするにした。平塚氏には、長春の東北師範大学で日本語教師をしていたときにむくげの会のゲストとして来てもらったことがあるが、現在は北京外国语大学で日本語教授法を教えている。

いよいよ七月一二日午後三時三〇分、中国民航922便は大阪空港を飛び立つた。十一日間の旅のはじまりだ。しばらくしてジュースができる。私は、飛行機にのると(?)ビールが飲みなくなる。スチュワーデスにそういうと、「ない」という。私の席はエコノミークラスの最前列。ファーストクラスをチラツとのぞくと、私のひがみか、ビールを飲んでいるように見える。次の食事の時間に今度は中国語でと「我要啤酒」と書いてみせたが「ソーリー」とのこと。完全にあきらめた。

九時二五分、着陸体制に入る。いよいよ北京午後七時、再び飛行機に乗り込む。大阪→上海はガラガラだったが、上海→北京は国内線で沢山のひとが乗ってきた。私は出入口のすぐ前にすわっていて無駄がなくていいことなどと思っていた。そして、七時五〇分やつと離陸。ちょうど夕日が沈む時間だ。アナウンスでは、北京まで一時間三五分とのこと。

九時二五分、着陸体制に入る。いよいよ北京だ。機体が止まるとトラックにタラップのついたのが近づいてくる。ドアは開いたがみんな降りる気配はない。どうも北京ではないらしい。なかにトラブルがあつたようだ。そういえば中國語のアナウンスだけ何回があつたようだ。近くに大学教授風の中国人に英語でどうしたのか聞くと、「北京空港の天気が悪い。ここは天津だ。一時間待つか、一泊するかはわからない」とのこと。天津はいい天気だがなかなか離陸する気配はない。九時に北京に着くはずの飛行機を平塚氏、そして明朝の九時の北京→長春の航空券をもつ北京の旅行社の人は待つてくれんだろうか……不安がつのる。

あせつてもどうしようもない。アメリカ映画が始つたのでそれを観ることにする。スリルとサスペンスの映画だ。中国民航もおつなものだと観ていたが、どうも際どい場面はカットして

計をみると、私の時計と同じ時間になつてている。今度は世界地図の世界の時計をみると、なんと東京が七時過ぎになつていて、日本から来た人間の時計が、さわりもしないのに一時間進んでいるのである。狐につままれたような、あるいはパンダにでもつままれたような……。友達になつた広島大学の学生とワイワイ言ついたら、前に座つていた人が、「中国はいま夏時間だ」という。ああなるほどと納得したが、かつては東京まで夏時間にしてたのでいささか感がくるつたのだつた。

いるみたいな感じ。男女がベットに入ったりしたらすぐ場面が變るのである。やはり、中国の解放政策もここまでかなどと考えたりする。

映画もおわり、夜中の十二時、もう天津泊りを覺悟しなければならないのかな、と思うころエンジンが回り出した。この間、約二時間半、日本だつたら乗客が騒ぎ出すだろうに中国人はおおらかだ。ときおりドアのところに来て外を見るくらいで、悠然としている。

天津→北京は約二十分、北京空港に着く。なかなか出てこなかつた荷物を持つてロビーに出たのは、午前一時二〇分。平塚氏は、待つてくれた。感謝感激!! 旅行社の「**様」と書いた紙切れを一枚一枚見ていくが、私の名前は見当らない。広大の学生の旅行社も来ていなみたいだ。二時一〇分、「平塚様々」でやつとタクシーをさがしてもらい空港を出発。途中で広大の学生をおろし、宿泊予定の北海賓館に行く。着いてチェックインしようとすると予約が入つてないといふ。北京往復、北京→長春の航空券代、北京一泊の代金として十六万円を大阪の旅行社に払つてきたのにと怒つてみても仕方ない。

そのうち北京の旅行社がやつてくる。空港で私が大阪の旅行社のバッヂをつけていなかつたから会えなかつたといふ。そんなこと聞いてもいないし、わしはもうしらん。长春行きの航空券は持つてきただが、もう早朝の飛行機での长春行きはあきらめていたので、旅行社がなんといつてもキャンセル。賓館で平塚氏に中國語でいろいろ言つてもらつてなんとか一緒に泊る。四時半、消灯。

翌朝九時三十分、北海賓館を出て、バスを乗り継ぎ北京駅へ行く。『地球の歩きかた・中国』を見ると、「北京のバスは荷物を持って突進す

るのみ」とあるが、まさにそのとおり。平塚氏と荷物をかかえてエイヤーとばすに飛び込んだ。

料金は五分ないし一角だから日本の感覚では安いことはたしかだ。中国の通貨は人民券と兌換券があるが、一元リ一〇角リ百分で日本円では一元リ三七円ぐらいだ。だからバス代は二四円ということになる。

十一時すぎに北京駅に着く。外国人専用の切符売場で翌十四日の三時五〇分発の长春行きの切符を買つてもらう。中国に来て初めて知つた

が、中国では汽車でも飛行機でも発駅でしか切符を販売しない。それも五日ぐらい前から予約をして買うという。だから、北京→长春の切符は北京で買ひ、长春→延吉の切符は长春で買わなければならぬのだ。出発前、単純に、长春まで飛行機で行つてしまえば、その後はなんとタクシーをさがしてもらい空港を出発。途中で広大の学生をおろし、宿泊予定の北海賓館に行く。着いてチェックインしようとするとき予約が入つてないといふ。北京往復、北京→長春の航空券代、北京一泊の代金として十六万円を大阪の旅行社に払つてきたのにと怒つてみても仕

方ない。

そのうち北京の旅行社がやつてくる。空港で私が大阪の旅行社のバッヂをつけていなかつたから会えなかつたといふ。そんなこと聞いてもいないし、わしはもうしらん。长春行きの航空券は持つてきただが、もう早朝の飛行機での长春行きはあきらめていたので、旅行社がなんといつてもキャンセル。賓館で平塚氏に中國語でいろいろ言つてもらつてなんとか一緒に泊る。四時半、消灯。

旅の三日目、一四日の朝、前夜の研究のとおり活動を開始する。まず平塚氏の東北師範大学時代の学生が働いている日中青年旅行社に行つた。そこでは帰りの二二日の北京→大阪の再確認をたのみ、さらに、长春の旅行社に連絡し



国際化の山は

午後三時五〇分、定刻に长春行きの汽車は出発した。一四六時、十五時間の夜行列車である。四人部屋の寝台車（軟臥）で、中國人が三人で、あと私。もう筆談しかない。「我來日本神戸、我行延吉為參加中日關係學會」てな具合である。いろいろ筆談していく、中国人のうち二人は台湾から親戚訪問に来た「兄兒妹」であることがわかつた。もう一人は山西省からきたと

いう。筆談するには中国の簡略字より台湾の漢字の方がずっと分かりやすかつた。なしにしろ暇なのでよく話をしたが、台湾人に夕食まで御馳走になつてしまつた。その日は早い目に寝た。

1988.7.31

翌朝、予定を二時間半ほど遅れて八時四〇分ごろ長春（旧「新京」）駅に到着。だんだん私の時間感覚も大陸的になってしまった。駅前で旅行社の人が「飛田雄一先生」と書いた紙をもつて迎えにきていた。延吉行きの軟臥は、一五日も一六日もとれないで、一五日の「硬座」をとつたとのこと。連日の夜行列車はきつい気もするが、それを好として夕方六時四〇分の列車まで市内見物をすることにした。ラストエンペラーの傳記の故宮が吉林博物館になつていて、白頭山は檀君神話で朝鮮人が降りたつところだが、満州族の故地も白頭山であるという。傳儀の部屋から見える庭園の一角には白頭山が造られていた。博物館には、日本帝国主義の「満州」「侵略」、中国人民の鬪い、「從皇帝到公民」の傳記の生涯などが展示されていた。平頂山の万人坑の写真と両手足を縛りつけかかとの下に煉瓦置き膝の上を煉瓦で叩く拷問室の模型が特に強烈であった。午後は南湖公園にいつてボートにも乗つた。ボートの借り方は一〇元払つてオールを二本貸してもらい、そこらにつないであるのを適当にのるというのだ。鉄製の重いボートで漕ぐのに力を要した。

帰りの長春→北京の航空券も購入しておかなければならない。旅行社に聞くと、中國民航は二日前からでないと販売せず、また購入にはパスポートが必要だという。パスポートを长春に置いて延吉に行く訳にもいかないので、予約だけいれてももらひ（予約にもなぜかパスポートが必要だつた）。帰りに長春で買うことにした。夕方、長春駅にもどり、六時四〇分発の団門行にのる。今度は延吉まで四四七キロ、十一時間の旅だ。（四号車硬座）一〇一番の席を探し出しだが、そこにはすでに人が座つている。その周りに立つてゐる人も沢山いるが、遠慮して延吉まで立つていくわけにもいかない。延辺朝鮮族

自治州への汽車だ、朝鮮族もいるだろうと少し大きめの朝鮮語で切符を見せながら、「ここは私の席だ、代つてほしい」といつた。そしたら、そのブロックに二人の朝鮮族の女性、Aさん、Bさんがいた。一〇一番の席をあけてくれ、また、いろいろと親切にしててくれる。長春では旅行社での支払で手間とり、缶ビールも買えずに飛び乗つたため、のどがカラカラだ。北京から長春まですつと暑くて、脱水状態になつてはいけない（？）と、思つていていたのにこまつたなあ！と思つていたら、自分のコップ（中国での汽車旅には必携）にお湯をくんできて飲ませてくれた。あなたは外国人なので車掌がきたら軟臥が空いてないかどうか聞いてあげるという。今度は筆談でなく朝鮮語で、いろいろとしゃべつた。日本から朝鮮族でない日本人が延辺まできて朝鮮語を喋つてゐるのがとてもおもしろいらしい。中国人の中学生ぐらいの子どもグルーピーとは筆談をしたが、「あなたは兌換券をもつてゐるか」ときた。人民券と兌換券は1対1.5とか言われているが、小さな子どもまで交換しながらのである。私は今回の旅行では、この交換と日本留学の話だけはしないことに決めていたのでもちろん交換しなかつた。横で成り行きを見ていたAさんは私に、「トン（お金）トッケビのようだ」といつていた。中国人一人ここでは朝鮮族も中国人なので本当は漢族といわなければならぬ——に具合悪いことは朝鮮語で喋るというようなこともあるようだ。

一時間ほどして車掌さん（漢族）が来たとき、Bさんが、私のことを言つてくれた。しばらくしたら、また戻つてきて「なんとかなる」とのこと。その次の駅あたりで、別の車掌さん（朝鮮族）がやってきて、軟座に移動しようといふ。そこでハグニング、Bさんと車掌さんがヤーヤーと親しそうに喋つてゐる。その車掌さんはBさんのおじさん（父の兄）だというのだ。私は、Aさん、Bさんにお札をいつて軟臥に移動した。そこは四人用の軟臥だが車掌さん用の部屋。私の方が、勤務時間でもあるしと気にすると、客がこちらからこうしてもなさねばと、一緒に飲んだ。途中のぞきにきた部下に支配人が「アンジユ（おつまみ）」を持ってきてくれといつたら、もう売店は閉つてゐるというのにそれまでてきた。また、丁度、きょう長春の短期大學を卒業して団員に帰るところだという娘さんも部屋に呼んで、「この娘は高校時代に日本語を勉強していたから日本語を喋らせててくれ」という。しばらく、三人で日本語、朝鮮語のチャンポンでわいわい喋つた。娘さんが、帰つたあとまた新しいビールが出てきたりした。

延辺での朝鮮語は朝鮮半島のそれとは少し違うところがある。むくげの会の佐久間さんから、「バップダ」は忙しいの意味だが延辺では「オリヨップタ（困難だ）」の意味でも使うと聞いていた。支配人と話してたら、六〇度のお酒を飲んだ時にのが「バップダ」となるというのである。中国に来て、切符を買うことの困難を感じていた私は、中国では、急ぐこと→危険→困難、となるので、延辺の朝鮮語はバップダ（困難となるのかなどとかつてに解釈してしまつた）。

延吉行の硬座しかとれなかつたおかげで、本当に楽しい経験をすることができた。翌朝にはやつとあこがれの延吉に着くと胸をわくわくさせながらも、ビールがまわってきて寝てしまつた。

延辺朝鮮族自治州への旅(下)

飛田雄一



2010年

寒いくらいだ。延吉は長春よりきれいな街のように入れた。

中国は日本と反対の右側通行なので横断には注意を要するが、もう一つ中国では車の方がえらいので人間は車がスピードを落してくれないことを前提に、速やかに横断しなければならない。横断中、思わず近くまで車が来ていてびっくりしたことが何度もあった。

自転車もよく走っているが、一度、ギヨとしている。さつぱりとした服装をした娘さんが自転車で走ってきた。横断歩道の前で私はそれを見送った。荷台に何かぶら下がっているので、チラッとみるとそれは「犬」。手足(足?)が長いもの、皮を剥がれた犬が無難作に自転車の荷台にくくりつけられて足をアラアラさせていた。この朝鮮族も「保身湯(ぼしんたん、犬汁)」を食べるのだろう。私は、延邊では保身湯を食べなかつたが、十年ほど前、大阪で食べたことがある。今はハワイにいるロン・藤好といつしょに猪飼野の専門店で食べた。こげ茶色した汁にねぎ、肉などがはいつている。というより、「ねぎ、肉以外はよく煮込んでいて何が入っているのかわからなかつた。肉の色は、黒っぽい感じだった。その時、全部食べられずに半分ちかく残したが、店のアジュマは、「始めてでこんだけ食べる日本人は珍しい」とほめてくれたものだつた。

夕方には学会の準備で忙しい韓俊光先生が来て下さつて、明日からの予定などについてお話をした。一八日から学会が始まるが、二〇日夜には延吉を出なければならない私の為に、白頭山行きを準備して下さつたとのこと。感謝感激である。

夕食は、ホテルの食堂でひとりです。ここでもチマチヨゴリを着た朝鮮族のウエイトレスをさがしていろいろと頼む。その日の夕食のメニューは次のとおり。基本的に中国料理で、鶏

1988.9.25

旅の四日目、七月一六日の朝、五時ごろ延吉行きの夜行列車で自をさます。さすがにすでに起きて仕事をしている支配人に到着の予定を聞くと、一時間ほど遅れているという。もうこのくらいのことはなんともない。六時半に延吉に到着。親切な支配人が近くにいる軍人をつかまえて、大切な客人だから送り届けてほしいといふようなことを言つてはいる。中國語だからそう言つたのではないかと私が思つてはいるだけだが

支配人さんにお礼を言つてから、列車から出でてくる沢山の人々と改札へ向つていった。改札を出ると、すぐ「中日関係学会様」と書いた看板を持つて何人かが迎えにきてくれていた。中國国内からも何人かの参加者がその看板の回りに集まつている。延辺歴史研究所の韓俊光先生、そしてわがペンフレンド柳東浩氏の顔も見える。やつと延辺にやつてきたのだ。

タクシーに乗つて白山ホテルに向う。白山ホテルは昨年できたばかりのもので、豆満江の支流・ブルハトン河のほとりにある十階立てのきれいなホテルだ。八、九、十階が外国人用の特別の部屋だといふ。その十階のおそらくいちばん景色のいいツインの部屋にひとりでいれてくれた。

まずはシャワールームへ、と部屋に入つて電気のスイッチをつけるがつかない。何回つけてもつかないので十階の受付へいく。さつき入つてくれた。

延辺朝鮮族自治州への旅(下)

てくるとき案内人に、「アンニヨンハシムニカ」とあいさつすると、「ニーハオ」だつたと思うが中國語だつたので、また筆談しかないと「洗面所電氣故障」とか書いて持つて行つた。こんどは朝鮮族の案内人がでてきて、一緒にいこうという。そして電気のスイッチをつけると待つことしばらく、ちゃんとつくのである。以前は頭の回転が遅いことを「螢光燈」などといつていたのを思い出したが、最近はそれを忘れていたのである。案内人が帰つた後、何秒かかるのかテストしてみた。ちょうど十秒。この十秒が私は待てずに故障だと思つたのである。原発反対、エコロジカルなどといつも言つてゐる私としては反省することしきりである。

延辺歴史研究所の人々と朝食をとつてから、ホーテルの部屋に戻り、シャワーを浴び洗濯をする。北京から連夜の夜行列車だつたので、体はドロドロ、やつと生き返つた気持だ。

午後、延吉市内を一人でぶらりとした。さすが朝鮮族自治州で、看板は必ず漢語と朝鮮語で書かれている。本屋さんに立ち寄つて延吉の簡単な地図を買つた。店には朝鮮族と漢族が半々ぐらいの感じだ。店では何人かの店員さんに向つて、少し大きめの朝鮮語で「地図が欲しいけれど、どこにあるか」などと聞くと、朝鮮族の人が答えてくれる。地図をもつて市内を少しうろろしてみた。延吉は、北京でのあの「真夏」がうそのように涼しい。半袖のシャツでは少し

1988.9.25

· 인터뷰.

吉林新聞 1988.8.30.

일본명의 <무공화>

본사기자 리선근

の蒸し焼きのうす切り、なすの炒めもの、きゅうりとエビの炒めもの、キャベツのキムチ、トマトの砂糖かけ——これは苦手で砂糖をかけないようにしてもらつたりした——それに泳川ビールだ。その後もだいたいこの線の料理で、少し肉が少ないがどちらかというと素食派の私は、大満足だ。

夕後は千客万来。

まず柳東浩氏と吉林新聞

の李善根記者がやつてきた。日本からきたむくげの会の私を取材にやつてきたのである。一時間ほどむくげの会のことなどわいわいと噪つた。年頃も同じくらいで意氣投合し、その後も延辯滞在中、何回かお会いした。帰る時にはカセットテープの八本セットを二組も、一組は私に、一組はむくげの会にくださつた。帰国後、送ってくれた吉林新聞の記事が左上のもの。ほめられすぎて少し恥かしい記事だ。

この取材の終わる頃に、延辺の児童文学に関係されている崔文燮、李泰鶴の両氏が来訪。中国に入る前に仲村修氏から、日本で発行された中國東北地方を舞台にした日本の児童文学作品を贈りたいので誰に贈つたらいいか関係者に会つてきてほしいと頼まれていたが、柳東浩氏にそのことを伝えるとこの両氏を紹介して下さったのだ。仲村修氏は神戸学生青年センターの朝鮮語の仲間で、朝鮮の児童文学を翻訳紹介する季刊『メアリー』を発行し、また、オリニの児童文学を読む会を主宰されている。

崔文燮氏は中国作家協会延辺分会児童文学委員会の副主任、李泰鶴氏も同委員会のメンバーで自身の作品集『北極のかもめ』をプレゼントして下さつた。他にも、同委員会が季刊誌として出版している『ピヨルナラ(星の国)』という雑誌の最近のものを五冊いただいた。他に『少年児童』『少年新聞』なども発行されているといふ。日本のグループとの交流のことなどをお願いするといへん喜んでくださつた。

とても充実した延吉の第一日目を終え、その日はゆつくりと寝る。北京から連日の夜行列車だつたのでやつぱり疲れている。

翌朝、朝食後、八時三〇分に延辺歴史研究所が用意して下さつた車で団們に向けて出発。研究所の千寿斗氏と運転手、柳東浩氏と私の四人

で約一〇〇キロのドライブだ。車のスピーカーから「釜山港に帰れ」が聞こえてくる。聞こえてくる音楽はほとんどが韓国の歌謡曲。延辯では人気があり、テープもほんのものもダビングしたものも良く出回っているという。

途中、団們を目の前にして舗装道路の工事に

でくわす。中国の舗装道路は砂利をきれいに敷きつめたあとにアスファルトを塗るという形のものが多いようだが、その工事をしているのだ。いま塗り始めたところだから一時間半ほどだめだと言う。一車線ずつ工事をするというのではない。一度に全部やるので全面ストップだ。しかし、もう大丈夫、ゆうゆうと一時間半、豆満江支流の川の対岸をときどき走る蒸気機関車などを眺めてすごす。

団們は、朝鮮民主主義人民共和国と国境を接する都南だ。豆満江をはさんで朝鮮の山々が見え、山腹に「速度戦」の文字もみえる。(二〇〇九)くらいの橋がかかっており、実際に川が流れているのは五〇×一〇〇㍍の感じ。上流に向つていた巡航船が方向を変えると急速に流れがいったのを見ると、流れは急なようだ。中国側の川辺は公園になつておらず、旅行者も多い。記念写真用に看板が出ていたり、アベックで顔だけ出せばチマチヨブリ、バジチヨゴリの新婚カップルの写真ができるというのもあつた。

川辺の公園で三〇人ほどの朝鮮族のお年寄りがテープで伴奏を流し、チャイナでリズムをとりながら踊つていて。日曜日だからなのか思つて聞いてみたが、毎日のことらしい。前号の「延辺朝鮮族自治州訪問記(上)」に団們の写真でメガネをかけた人が、笑いながらものついた帽子をグルグル回しているのがある。あの写真を私の写真と間違つた読者がいたが、あれは私ではなく、——失礼な! ——そこで踊つていた老人である。かれらは引退した人々で、老人の活動として毎日こうして午前中から踊つて

いるのだという。中国では引退に二種類があるという話を聞いた。「退職」と「離職」だ。現役時代の貢獻度によるものらしく、離職の場合は最後の給料の一〇〇%をもらえるが、退職の場合は八〇~九〇%になると。國門から延吉にもどり、午後は市内見学。まず延吉博物館へ行った。ホテルから歩いて五分ほどの距離で、古代から現代までの文物を展示している。会議中とかで閉館していたが特別になかを見せてもらつた。延辺朝鮮族自治州の歴史を展示していたところが特によかった。日帝時代の「満州」における抗日鬪争の写真、武器、ピラ、生活用品などがあった。写真のなか一枚に日本の共産主義者の「伊田助男」の名前がある。聞くと、この伊田助男が抗日運動の拠点に武器を届けて来たというのである。日帝の悪辣な仕打を暴露する展示が続くながて日本人の私を少し安心させるないようであつたが、伊田助男がどうゆう人物か、どうゆう事情で届けたかなどわかつていよい。博物館見学の後、延辺大学、そしてその裏山にある延辺朝鮮族自治州の生みの親ともいえる朱徳海氏の記念碑、そしてかつての「満州」国の延辺監獄の跡地に建てられた延辺芸術劇場などを訪ねた。

夕食後、柳東浩氏と街の朝鮮族の飲み屋に行くことにした。ビルとおかずを注文し二人で朝鮮語と日本語のチャンポンで話していると、二人の女性が席にやつてきた。一人はその店の経営者で、日本に行つて経営の勉強をしたいのではなく日本語を教えて欲しいと柳東浩氏に一生懸命頼んでいた。もう一人は北京から来たという女経営者の友人の同じく朝鮮族で、看護婦。北京では漢族の学校に入つていたので、朝鮮語より漢語の方が話しやすいという。はじめは、高い外国人料金をとられたらいけないので、韓国からきた同胞にしておこうということでお入つたの

で、「南朝鮮は大田からきた」などといつていった。しかし仲よくなつて、嘘も白状しいろいろと喋つた。

北京からきた朝鮮族の女性がダンスホールに行こうというので、一緒に出かけることにした。白山ホテルの建物のなかにダンスホールがあつたのである。入場料は一人二・五元(約七〇円)。私が払うつもりだつたが、その女性が払つてくれる。日本の感覚では決して高くはないが、中国では平均月収が一〇〇元として、ダンスホールの一人分が月給の四〇分の一。たいへんなお金だ。申し訳ないが「払う払う」というので甘えて、払つてもらつて柳東浩氏と三人、ダンスホールに入つた。

延吉のダンスホールは健康的だ。踊るフロアは禁酒禁煙。酔つ払つて踊りにいくのはダメで、タバコを吸いたければ廊下に出なければならない。着飾つた約三〇〇人の若い男女でダンスホールの中は熱気ムンムンだ。ほとんど全部朝鮮族だという。どこの朝鮮人も踊りが好きなようだ。ここでも韓国の歌謡曲がよくかかる。生バンドでも、チヨ・ヨンビルの「ミオミオ」などを演奏し、歌も歌つてゐる。私は、延吉で韓国曲に合せて(?)、踊りを踊つてきたのである。ホールには、カップルで来ている人も、男友達、女友達だけで来ている人もいる。外国のいろんな曲も演奏していた。ワルツもジルバもゴーゴーもなんでもやつていたようだ。しかし、激しいリズムの「ディスコ」が一番の人気なようで、例えは、ワルツのときは一〇〇人、ディスコのときは二〇〇人がホールの中央のフロアで踊つてゐるという印象だつた。夜、飲みに街へ出たおかげで楽しい経験をすることができた。

出発した。車はトヨタのランドクルーザー。山道にはいいのだろう。白頭山まで片道六二〇キロという。六二〇キロといえば、神戸から富士山へ行くのよりも遠い。同行の柳氏は白頭山に登るのは初めてだというが、延吉と白頭山はそんなに近くないのである。

今回の旅の収穫のひとつは、「満州」のイメージが変わったことである。白頭山まで延々と広野を走るが、一時間、二時間と走つても景色があり変わらない。とにかく広いのである。そして私にとつて決定的なイメージエンジは、「満州」の広野はへ縁豊かなハ廣野だったのだ。ある。「満州」の話は、例えば冬にオシツコをしたら、するはしから凍るとか、耕そつとつるはしをふれば凍つてついた大地にはねかえつてしまふ、というようなことをきいていた。へ廣漠なる大地ハ荒野ハといつたイメージだつたのであるしかし実際は違つた。少なくとも夏は違うのである。牧草地、田んぼ、トウモロコシ畑などが延々と続く綠豊かな大地なのである。日帝が貪欲に「満州」を侵略するハ実利ハがあり、だからこそ侵略したのである。このことを実感し、私は「満州」のイメージエンジができたのである。

歴史の現場を訪ねることは大切なことだといわれるが、途中、「間島五・三〇暴動」で有名な龍井を通過した。「五・三〇暴動」の中心地は龍井と頭道溝だと延辺歴史研究所の韓俊光先生にうかがつたが、その龍井、頭道溝を実際に通つてみてこの二ヵ所が一、二キロの距離でなく一〇、二〇キロの距離であることがわかつた。日帝もそう簡単には鎮圧できなかつただろう、などと考えたりしてみた。また「青山里戰闘」で有名な山々の近くも通つたが、それは広野の中の山塊、ここに逃げ込んでゲリラ戦をやらなければ山帝も勝てそうにならないなあ、と思つた。

1988.9.25

の麓まで来る。まっすぐ行けば長白瀑布、左へ曲れば山頂というところだ。ここから山頂へは本格的な山道で、普通の車では登れないが、我々が乗ってきたラントグルーザーなら大丈夫だといふ。山頂まで歩けば一時間、車では四〇分の距離だ。さあ出発、とはいかずに次の車をまつといふ。次の車は普通のマイクロバスで山道を登れないのでもその車の人を何人か乗せるためだといふ。私がチャーリーした車なのに思つたりするが待つしかない。一時間ほどまつて四人のアメリカから来た韓国人をのせて出発した。急勾配でときどきガス入りがあり怖いほどだ。天池が見えるかどうか心配だ。車は山頂直下の気象台のところに止る。目の前には天池の外輪山が広がっている。歩くこと約一〇分、山頂で周囲が一三・一キロというから当り前だがピックリした。五〇メートルのレンズでしまつた一枚に収らない。連続写真を四枚とつてやつと全体を写した。

そして、天池はまつさおだ。水深は深いところで三七三尺あるという天池だからこんなに青いのか。山頂から天池の水面まで二~三〇メートルもあるで、真下をのぞきこむと足がガタガタする。アメリカから来た十数人の韓国人のグループはクリスチヤンのグループで、前日に四つもあったケループだ。感激のあまり泣き出す女の子もいる。山頂の一番高いところに集まつて、讃美歌や韓国歌(國歌)を歌い、「ハングルクントイルマンセー(韓國統一万歳)」を叫んでいた。しばらくするとガスがでてきた。神祕的なななどと考えているうちに、すぐ天池は見えなくなってしまった。三回目に来てやっと天池が見

えたと喜んでいた観光客もいたが、私はラツキ一だった。白頭山觀光は天池が見えれば一泊二日で、見えなければもう一日がんばつて二泊三日にするという。車の関係で観光團のうち半數が天池を見て半數が翌日登つて見えなかつた時など、「はやくかえろう」と組と「もう一日がんばろう」組の間で争いが起ること聞いた。満足して山麓のホテルに入り、夕食後は在米韓国人のグループと歌の交換会をした。彼らは、移民してからだいたい五一〇年でみんなアメリカの市民権を取つてゐるという。ソウル・オリンピックには報酬はでないが飛行機代と宿泊費を韓國側が負担してくれるので通訳に行くという青年もいた。

#

翌朝は、まず温泉に入る。白頭山には九〇度ぐらいの温泉が沸くのである。ホテルのすぐ近くにホテルの温泉があるので案内人に連れていつてもうが、先客があるので普通の温泉の方でもいいかといふ。もちろんいいといつて大衆浴場の方に入る。服を着替える之間は鞆のまま入る。まあそうかなあ、と思つて次に服を脱いで湯舟の方に行こうとする。スリッパをもつてきてこれをはいていけという。どうもほんとの湯舟以外は土足となつてゐるらしい。大衆浴場なので近くで働いている労働者が入つてくるが、彼らはまず服のまま湯舟の近くまできて顔や手を洗い、それからおもむろに、という具合である。お湯は少し熱かつたがゲートだつた。

朝食後、今度は山頂ではなくて長白瀑布のほうに登る。車で一〇分ほど登つてから歩き出す。しばらく歩くと長白瀑布が見えてくる。たかさ七〇メートルほどの滝だがじつに美しい。天池からはそれが長白瀑布となつてゐる。あたりには七月の終わりだというのに雪も一部に残つてゐる。また左岸に天池まで登れる登山道がある。観光

客用に三元で運動靴のレンタルもしている。見たところ一時間ぐらいで登れそうだ。自称・山男の私としては登りたいところだが、延吉までの帰り六二〇キロがあるのであきらめて戻ることにする。またほぼ丸一日の車の旅で夕方、延吉に戻る。

翌二〇日午前中、開催中の日中學術討論会に

井

初めて参加する。二階のホールだといふので行ってみたらあのダンスホールだつた。ただ正面に会議の横幕があるので、ダンスの時にはきちんと光つていたミラーが光つていないだけだつた。日本の一線の「満州」研究者が八名参加させていた。日本側の発表の時には、ほとんどの先生方が中國語で発表されていて感心した。無窮花出版社の社長として招かれている私としては、もしかしてはいけない、と「中國の朝鮮族」の出版のことなど一〇分ほどのスピーチ原稿を作つたが、うまく出番は回つてこなかつた。

夕方の列車で長春に向うことになつてゐる私は、延吉最後の日となつたので、午後、また学術討論会をさぼつて市内に出た。「誰が第三者か?」という朝鮮語の映画の看板が目に止つたのでその内容を柳東浩氏に聞いてみた。この映画はいま話題の作品で、大学時代に妻に勤いてもらつて大学に通つていた男が同級生と恋愛した。さて、卒業後、この男は、①好きな同級生と結婚すべきか、②愛を失つたが恩をうけた妻との結婚生活を続けるべきか。まだ長い青春を棒にふるべきではないと①を支持する若者と、恩知らずめと②を支持する年配者との間で論争が続いているといふ。

最後の散歩も終わり、ホテルで荷物を整理し、夕方、延辺歴史研究所の韓俊光先生たちに見送つていただき長春行きの夜行列車に乗つた。楽しい刺激的な延辺旅行だつた。(おわり)